

オーストラリア幼稚園実習研修に関する一考察 International Kindergarten Teacher Training

福智 佳代子

キーワード 海外幼稚園実習研修、グローバル教員養成、多言語教育

1. はじめに

東京オリンピック・パラリンピック開催に合わせて「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が発表され、2011年度に必修化された小学校英語は、2020年度に教科化される予定である。この中では、2016年学習指導要領改訂、2018年度から段階的にグローバル化に対応した英語教育改革が実施され、小学校中学年では学級担任が中心、高学年では、英語指導力を備えた学級担任+専科教員が指導する [1] (文部科学省,2013) とされている。幼稚園でも、58%、約6割の幼稚園で英語教育が実施されている [2] (Benesse, 2013)。2015年3月オーストラリア・クイーンズランド州ロビーナにある藤国際幼稚園 (Fuji International Kindergarten) で、神戸海星女子学院大学現代人間学部心理こども学科学学生4人は、保育実習 (Teacher Training) を体験した。現行の学習指導要領「生きる力」の中の小学校英語活動の指導目標としてあげられている

- (1) 自言語・自文化に誇りを持ち、異なることばや文化を理解しようとする力 (異言語・異文化理解)
- (2) 積極的に他者とコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する (人間関係)
- (3) 外国語 (英語) で他者とコミュニケーションをする能力を養う (外国語教育)

に加え、今回、学生が積極的に多民族・多言語・多文化の国オーストラリアでの幼稚園教育体験しようとしたことは、グローバル人材の資質そのものを具現化したといえる。多様な文化的背景を持つ子どもたちが通うオーストラリアの藤国際幼稚園での実習体験は、グ

ローバルな視野と行動力を持ち、将来積極的に挑戦し活躍できる教員、幼稚園教諭・保育士の育成に貢献する。

多民族国家であるオーストラリアでは、英語を第2言語 ; English as an Additional Language or Dialect (EAL/D) とする人々のための英語習得プログラム [3] BANDSCALES や、英語以外の外国語習得のためのプログラム Language Other Than English (LOTE) など、さまざまな言語教育が、国あるいは州の言語政策として行われている。オーストラリア・クイーンズランド州ゴールドコースト近郊の住宅地にある藤国際幼稚園では、様々な家庭内言語を持つ子供たちが、共通語英語で保育されている。日本でも、様々な異言語・異文化の背景を持つ子供たちが、イマージョンスクールやインターナショナルスクール、日本の幼稚園に通っている。今後の幼稚園・小学校などでの英語教育で活躍できる人材育成のためにも、多言語・多文化教育が先行している教育機関現場での実習研修を体験することが、本学学生の研究意欲を高め、将来的に小学校英語教科化と連動するであろう幼稚園での多言語教育の指導技術の向上に貢献するのではないかと考え、2014年度、児童英語学概論及びキッズ・イングリッシュを受講した学生に、オーストラリア幼稚園実習研修を企画した。

本稿では、先ず、多民族・多言語・多文化社会オーストラリアに見る教育制度について概観する。次に、オーストラリア幼稚園教育と日本の幼稚園教育、オーストラリア幼稚園実習研修の概要、最後に、オーストラリア幼稚園実習研修参加学生の事後レポートから窺

われる現在のオーストラリアの幼稚園教育と実習の成果について報告する。

2. 多民族・多言語・多文化社会オーストラリア

オーストラリアは、第2次世界大戦後、通商協定が締結（1957年）されるまでは、いわゆる白豪主義の国であったが、経済交流が活発になるに連れ、世界各地から、経済活動の基盤を支える長期・短期滞在者や移民が急速に増えていった。オーストラリアでは、公用語・英語は Standard Australian English(SAE)と称されている。オーストラリア先住民・Native Australian 及び移民によって、英語は第2言語 English as Second Language(ESL)であり、それぞれの家庭内言語 Home Language(HL)と共に、生活言語として使用されている。従来、オーストラリア連邦政府では、ジョセフ・ロ・ピアンコ (Joseph Lo Bianco)によってまとめられた言語政策 National Policy on Language(NPL, 1987)により、The Australian Language Levels Guidelines(ALL)が作成されたが、これはあくまで指針であり、シラバス・カリキュラムの策定は各州に委ねられてきた。連邦政府の教育省が設立した National Language and Literacy Institute of Australia(NLLIA)によって開発された [3]The NLLIA ESL Bandscales には、ESLとしての SAE のガイドラインが示され、英語以外の言語は、National Policy on Language(NPL)に [4]Language Other than English(LOTE)として示されてきた。

オーストラリアでは州ごとに教育制度が定められている (図1)。従って、就学年齢、就学年数などが週ごとに違っている。現在、オーストラリアでは、[5]ACARA (Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority) が、Foundation、すなわち Kindergarten や Prep と呼ばれる就学前教育

から Year 12 までのオーストラリア全体のカリキュラム Australian Curriculum の開発を進めている。Australian Curriculum では、Literacy, Numeracy, ICT, Capability, Critical and Creative Thinking, Personal and Social Capability, Ethical Understanding, Intercultural Understanding が扱われている (図2)。

外国語教育に関しては、1987年連邦議会において、The National Policy on Languages が承認され、翌年から各州の初等、中等教育課程で Language Other Than English : LOTE 「英語以外の言語」、すなわち、9 優先学習言語 (日本語、フランス語、インドネシア・マレー語、スペイン語、イタリア語、中国語、ギリシャ語、韓国語、アラビア語) が、初等・中等教育課程で学習されるようになった [6] (国際交流基金)。アジア重視の言語政策は、 [7] 「学校におけるアジア語・アジア学習推進計画」 National Asian Languages and Studies in Schools Program(NALSSP), 2009, [8]アジア白書; White Paper October 2012 へと引き継がれることになる。

2.1 オーストラリアの言語教育の背景

オーストラリアでは、もちろん公用語は英語であるが、これに加え、各移民の母語が、Community Language あるいは、Home Language として政府の支援を受けている。1987年連邦議会において承認された The National Policy on Languages に述べられているオーストラリアの言語政策の基本指針は、「国民すべてのための英語教育」: SAE, 「アボリジニおよびトーレス海峡諸島民の固有言語の維持継承」「国民すべてを対象とした英語以外の言語教育」LOTE, 「国民への均等かつ広範な言語サービスの提供」とされている。これは、オーストラリアが、ヨーロッパ、アジアなど世界各地からの移民及びアボリジニ

およびトーレス海峡諸島民などの Native Australian から成り立っている多民族・多文化国家であり、冒頭で述べたように、アメリカが、コミュニケーション、文化、コネクション、比較、コミュニティを5つの目標領域 5C として掲げた言語政策をとっているのと同様に、教育に力を入れる言語問題の重要性を示唆している。オーストラリアの多言語教育は、多民族・多文化社会の共生を図るものとされてきたが、現実的には、歴史的必然性、さらに、アジア圏におけるオーストラリアの経済政策が根幹にある言語政策であるといえる。しかしながら、アジア文化・アジア言語を基盤とする多文化共生は、長年オーストラリア経済の戦略的言語政策であったとしても、現代のグローバル社会における多民族・多言語・多文化共生社会でのグローバル人材育成を急務としている日本の言語教育、言語政策が参考にすべき政策であるといえる。

2.2 オーストラリアの教育制度

オーストラリアにおける初等、中等教育は、財政面でオーストラリア連邦政府の援助もあるが、州政府の所管になっている。一般に初等教育（小学校）は6年間または7年間、中等教育（中学高校一貫教育）は6年間または5年間である。州による差異があるものの、両課程を通算すれば12年間となる。公立校の場合、中等教育機関には内容的な区分として、特別選抜高、音楽校、外国語校、スポーツ校などもある。私立校の場合は、独立系とカソリック系があり、初等教育校、初中等部分一貫校、初中等完全一貫校、中等前期校、中等後期校、更に中等一貫校というさまざまな設置形態があるが、これも通算期間は12年である [6]（日本語教育国別情報、2003）。

外国語学習に関しては、ほとんどの州で必修化されているが、言語の選択や学習期間については、州教育省、学校、地域社会、保

護者の方針により、それぞれ州毎に違っている。1987年連邦議会における The National Policy on Languages 以来、各州でシラバスが策定され、初等課程から中等課程への一貫性を視野に入れた教育制度に対する試みがなされているが、学校間で較差があり、学習内容や到達目標もその学習状況に応じて変わる。初等前期課程では、言語運用能力の向上より、むしろ異文化理解や国際理解が重視されている [6]（日本語教育国別情報、2003）。また、初等から中等課程にかけて生徒が学習する言語に一貫性がないため、中等課程で初めて学修する生徒と初等課程ですでに学習している生徒が混在する場合がある。そのための教授法の教員研修、教材研究なども行われている。

藤国際幼稚園のあるクイーンズランド州では、2000年に、10年間の教育構想[9] Queensland State Education 2010 (QSE2010)が提言された。その中で、文化のつぼ“a cultural melting pot”という表現が使われている。アメリカにおいても English Only Vs. English Plus、ルツボからサラダボウルという表現がなされていたが、アメリカ同様、オーストラリアも、アボリジニとトーレス海峡諸島民、世界各地からの移民で成り立っている多民族・多文化国家であり、[9]QSE2010 は、*Learning to live with complexity, uncertainty, and diversity*” が示すとおり、多様化した現代社会に適応できる人材育成を目指したものである。この各州で差異のある教育制度に関しては、政治的な変遷はあるが、前述の ACARA, 2008[5]で、クイーンズランドだけではなく、オーストラリア全州統一のカリキュラムの作成が行われている。

以上に概観したオーストラリアの言語教育の背景、その基礎である幼稚園教育のすべてを理解するには、今回実習期間はあまりにも短いかもしれないが、少なくとも、学生にとっては、オーストラリアの教育制度に関する

講義も含まれていることから、多民族・多言語・多文化社会の中での教育のあり方を考える機会となる。

3. オーストラリアと日本の幼稚園教育

オーストラリアでは、幼稚園教育について、Australian Curriculum に学習領域が、クイーンズランド州の教育制度については、[10] “Queensland Curriculum & Assessment Authority”, 2015 (QCAA)に、幼稚園教育のガイドライン“Queensland kindergarten learning guideline (QKLG)が述べられている。

日本における幼稚園教育のねらい及び内容については、現行学習指導要領・生きる力では、1. 健康、2. 人間関係、3. 環境、4. 言葉、5. 表現の5領域とされている。オーストラリアでは、Prep: Early Years Curriculum Guidelines に、学習領域として、The Arts, Health and Physical Education, Civics and Citizenship, Technology, Economics and Business, Languages、及び指針、教材などが掲載されている[10] (QCAA, 2015)。

内容に関する細かい比較は、今後比較分析を行う予定であるが、ここで“Languages”と複数形にされていることに注目したい。すなわち、オーストラリア・カリキュラム学習領域“Australian Curriculum F(P)–10 learning areas”では、Kindergarten や Prep の段階から、すでに「多言語」教育が明記されている。日本の学習指導要領では、単に「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う」とされており、多言語については触れられていない。今後検討すべき事項であると考えられる。

4. 藤国際幼稚園実習研修の概要

今回、オーストラリア藤国際幼稚園実習研修に参加したのは、キッズ・イングリッシュ・プログラムを受講している神戸海星女子学院大学心理こども学科2年次生4人である。学生たちは、児童英語教育に興味を持っており、小学校英語活動、公民館での英語講座を経験したことがある学生で、将来、幼稚園教諭あるいは保育士を志望している。神戸海星女子学院大学英語観光学科には、留学、海外インターンシップ、ツーリズム研修など、英語観光学科学生対象の海外体験プログラムが完備されているが、心理こども学科学生対象の海外幼稚園の実習を体験できるプログラムに関しては、認定留学となる。藤幼稚園滞在中の実習研修に関しては、Fuji International Kindergarten Teacher Training Plan を参考に、ホームステイ先での生活を含め、あらかじめ計画書を作成した(表1)。毎日行われる講義や、観察実習&子どもと関わる体験実習などは、オーストラリア教育機関認定正規カウンセラーである [11]Fuji Educational Services Australia(Qualified Education Agent Counsellor <http://fuji-fuji.com/>)が行った。

学生たちは、事前にクラスルームイングリッシュ、幼稚園で紹介できる絵本、エプロンシアター、歌、折り紙など日本文化が紹介できる遊びなどの準備を行った。事後の学習では、藤幼稚園での講義、こどもとの関わり、部分実習、ホームステイ先での生活などをポートフォリオとしてまとめた。以下はオーストラリア幼稚園実習の概要である。

研修先

藤国際幼稚園

Fuji International Kindergarten

Fuji Educational Services Australia

研修場所

クイーンズランド州 ロビーナ

研修日程

平成 27 (2015) 年 3 月 8 日 (日) ~ 3 月 20 日 (金) 13 日間

5. オーストラリアの幼稚園教育と実習の成果

13 日間にわたるオーストラリア藤国際幼稚園での実習体験は無事終了した。学生たちは、毎日の実習報告、こどもと関わる体験、教育制度などオーストラリアの幼稚園教育に関する講義から、オーストラリアでの幼稚園教育についてまとめている。

以下は、提出された上田朝子のレポートから、オーストラリアでの幼稚園教育と藤幼稚園の教育についての講義内容 (原文) の一部を紹介する。

[上田朝子レポート]

3 月 10 日 (火) (第 1 日目)

(1) Orientation オーストラリア (クイーンズランド) の教育制度



(2) 日本とオーストラリアの違い

日本の学校の新学期は 4 月の初旬に始まるのに対し、オーストラリアの学校では 1 月下旬 ~ 2 月初旬に始まる。また、日本が 4 月 2 日生まれ ~ 翌年 4 月 1 日生まれが同じ学年になるのに対し、オーストラリアでは 7 月 1 日生まれ ~ 翌年 6 月 30 日生まれが同じ学年になる。日本のように幼保がわかれておらず、オーストラリアの幼稚園 = 『認定こども園』のようなものである。日差しが強いため、外遊びでは必ず帽子を着用している。また、オーストラリアは、児童教育において PC の導入が世界で 5 番目くらいに早かった国である。

(3) Fuji International Kindergarten (藤国際幼稚園) について

・ 26 か国 (220 の家族) の様々な国の子ども

たちが通っている。

- ・ 様々な遊びが同時展開される自由保育。
- ・ 日本語の授業が毎週水曜日にある。
- ・ 毎週、専門家が来て行う授業がある。

Computer Kids…PC の授業

Itty Bitty Stars…音楽の授業

- ・ 10 年ほど前から PC を使った授業を取り入れていた。一番大きなクラス (さつき組 5・6 歳児) では、電子黒板を使った授業を行っている (タッチパネル式)。
- ・ Gross motor (= 全身を使った動き) を取り入れた遊びが多くある。ex 水泳、テニス
- ・ 障害をもつ子ども 1 人につき 1 人の専任がつき、その子どもを理解したうえで、声の大きさなどを工夫し、対応している。できるだけほかの子どもたちと一緒に同じように活動をする。

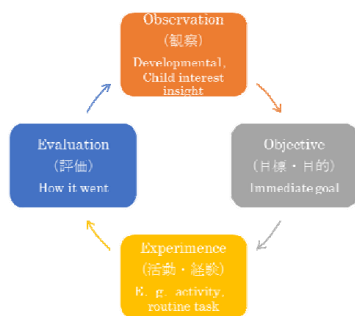
(4) Fuji International Kindergarten Long Term Goals (藤国際幼稚園が目指す 5 つの目標) (省略)

(5) Fuji International Kindergarten (藤国際幼稚園) の先生方が大切にしていること (省略)

第 2 日目は教師論、第 3 日目、Areas of Learning : 学習の領域と発達論、5 つの発達領域、第 4 日目は Programming Circle : プログラムのサイクル、第 5 日目は、レッスンプランのたて方、第 6 日は、フィールドトリップ、そして、最終日は部分実習、評価 Evaluation (以上、上田朝子レポート) となっており、この部分で各学生の行った部分実習とその評価の記述がされている。

これに子供と関わった実習日誌がつけられており、オーストラリアでの幼稚園実習の詳細が、参加学生のレポートに書かれている。以上の報告及びカリキュラム内容からも、講義と実習での体験が結び付けられていることが分かる。講義は英語で行われていたが、専門用語に関しては、日本人理事長藤原一昭先

生の説明もあり、ポートフォリオなどの記述からも、学生たちが内容を理解していることが窺える。ハンドアウト類など参考資料も添えられており、オーストラリアの教育制度から幼稚園教育の実際まで、ポートフォリオは非常に綿密に作成されていた。



6. まとめと今後の課題

日本の小学校では、2009年に外国語が小学校英語活動として必修化されたが、教科化されるのは2020年度の子定である。オーストラリアの教育制度には、多民族・多言語・多文化社会の共生のために、その根幹となる言語政策に取り組んできた歴史の違いがはっきり表れている。「グローバル化に対応した英語教育改革(2013)」で、グローバル人材を育成することが急務とされているが、オーストラリアの教育制度には参考にすべき点が多々あるのではないかと考えられる。今回のオーストラリア幼稚園実習研修は、短期間であったとしても、多言語教育を行っている幼稚園で、その片鱗を体験できたという点においては、貴重な体験ができたといえる。「グローバル化に対応した英語教育改革」は、あくまでも「**英語**」教育のみに焦点が絞られており、オーストラリアでの言語政策の中にある「**Languages**」、すなわち「**多言語**」教育の文言は見当たらない。さらに、オーストラリア・カリキュラム：Australian Curriculumの「F(P)-10」は、幼稚園(Foundation, Prep)から10年生、クイーンズランド州カリキュラム：Queensland Curriculum & Assessment

Authority(QCAA)の「K-12」は、幼稚園Kindergartenから12年生を示している。これは、「多言語・Languages」教育が、言語教育が始められるスタートの地点から一貫して行われていることを示している。

2020年には小学校3年生から英語活動が、5年生からは教科としての英語教育が始められる。冒頭で触れたように、日本では、約6割の幼稚園で英語教育が実施されている。今後は、幼稚園でも多言語教育の必要性が増してくると考えられる。多民族・多言語・多文化共生とその教育を先行しているオーストラリアの藤国際幼稚園での実習研修は、参加学生にとってはそれを実感できる体験となった。海外幼稚園での実習体験は、内向きではなくグローバルな視野と資質を持った幼稚園教諭・保育士の育成に貢献するものと考えられる。

参考文献

- [1]文部科学省,2013「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.html
- [2] Benesse, 2013「私立幼稚園、知育重視の傾向 約6割が英語を実施」
<http://benesse.jp/news/kyouiku/trend/20130820080008.html>
- [3] BANDSCALES, 2015「クイーンズランド州政府バンドスケールズ」
<http://www.education.qld.gov.au/students/evaluation/monitoring/bandscales/>
The NLLIA ESL Bandscales, Department of Education, Training and Employment
- [4]Language Other than English(LOTE) LOTE Curriculum Framework-1998
<https://csf.vcaa.vic.edu.au/lo/kslo.html>
- [5] ACARA, 2008 “Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority”
(<http://www.acara.edu.au/default.asp>)

Australian Curriculum

<http://www.australiancurriculum.edu.au/>

[6]国際交流基金 Japan Foundation, 2003,
2012 「日本語教育国別情報」

<https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2014/australia.html>

[7]「学校におけるアジア語・アジア学習推進計画」 National Asian Languages and Studies in Schools Program (NALSSP) , 2009

<http://www.curriculumsupport.education.nsw.gov.au/nalssp/>

[8] アジア白書 “*Australia in the Asian Century*” White Paper October 2012

<https://theconversation.com/au/topics/australia-in-the-asian-century>

[9]Queens land State Education 2010
(QSE2010)

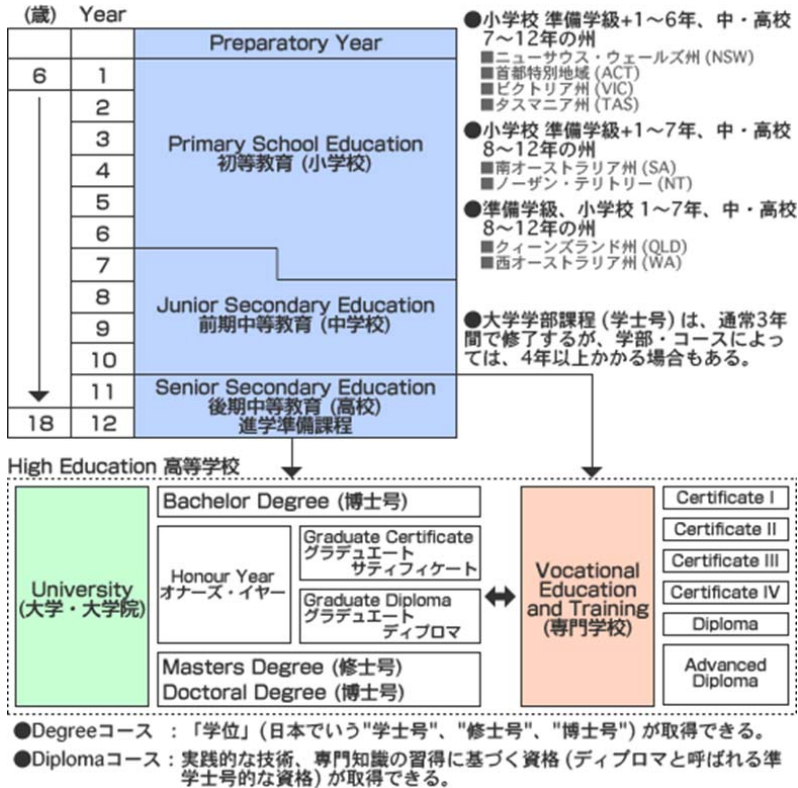
[10] “Queensland Curriculum & Assessment Authority(QCAA),2015

<http://www.curriculumsupport.education.nsw.gov.au/nalssp/>

[11]Fuji Educational Services Australia:
Qualified Education Agent Counsellor
<http://fuji-fuji.com/>

添付資料

図1. オーストラリア教育制度



©オーストラリア政府教育情報センター http://australia.or.jp/_old/discover/chapter07/005.html

図2. General capabilities in the Australian Curriculum

<http://www.australiancurriculum.edu.au/>



表 1

Fuji International Kindergarten Teacher Training Plan					
オーストラリア藤国際幼稚園 幼児教育研修 2014					
実習研修計画					
研修には、日常基礎英会話及び実習授業に関する事前研修、本研修に関するポートフォリオ作成・報告の事後研修を含む。					
日程	時間	計画内容	幼児教育研修	時間	英会話自主研修
1日目 3月10日(火)	午前	ブリスベン到着 市内観光、藤幼稚園へ	オーストラリア文化体験 学習	4	
	午後	オリエンテーション、ホームステイ先へ	オリエンテーション	3	
2日目 3月11日(水) 幼稚園研修	9:00	藤幼稚園		7	家庭内日常会話
	10:00	藤幼稚園ガイドツアー			
	10:30	モーニングティー	9:30 ~ 16:00		
	11:00	クラス授業見学	6.5時間= 4.6コマ		
	11:30	講義&ワークショップ 1. 藤幼稚園について、 2. 子どもと関わる英語表現			
	13:00	こどもたちとランチ	ランチは各自用意すること		
	14:00	講義&ワークショップ ※The Bear, Kindergarten Teacher			
	15:30	観察実習 & 子どもと関わる体験実習			
	16:00	ホームステイ先へ帰宅			
	18:00	日常会話(1) House Keeping手伝いと食事		2	日常会話
20:00	レポート作成後自由時間		2		

以下省略